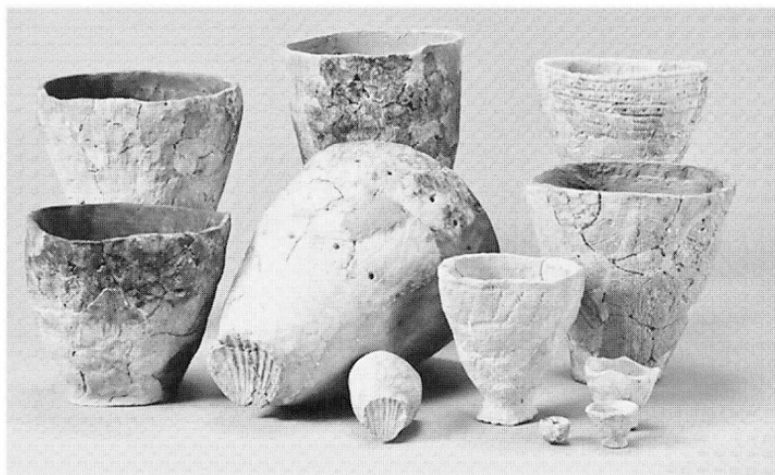




年 組 名前

道新でワークシート

八千代A遺跡から出土した深鉢形土器



帯広「八千代A遺跡」出土品 重文指定へ

文化審答申 石器や土器など580点

国の文化審議会は9日、帯広百年記念館（帯広市）保管の「八千代A遺跡出土品一式」など7件の考古資料を重要文化財に指定するよう林芳正文部科学相に答申した。今夏にも指定される予定。考古資料の国宝・重要文化財は計640件となり、道内では22件目となる。

文化庁によると、八千代A遺跡は約9千年前の縄文時代早期の竪穴住居103軒からなる大規模な集落跡。1985年から88年にかけて発掘・調査された。重文には、出土品の中でも状態のよい石器や土器など計580点が選ばれた。内陸部では珍しいホタテ

貝の貝殻で文様を付けた深鉢形土器のほか、クマの頭部をかたどったとの見方もある土製品、琥珀玉などの装身具もある。

答申では「多彩な文化様相を示す資料であり、日本列島でも早い段階に確立した大規模集落跡からの出土品として価値が高い」と評された。

審議会では、三十三間堂（蓮華王院本堂、京都市）に並ぶ1001体の千手観音立像など5件の美術工芸品を国宝に、八千代A遺跡出土品のほかキトラ古墳（奈良県明日香村）の極彩色壁画など49件を重要文化財に指定するよう答申した。

2018年3月10日朝刊社会面

①八千代A遺跡の出土品の中で、重要文化財として選ばれたのはどのようなものですか。

②出土品から、縄文時代の人々はどのような生活をしていたと考えられますか。